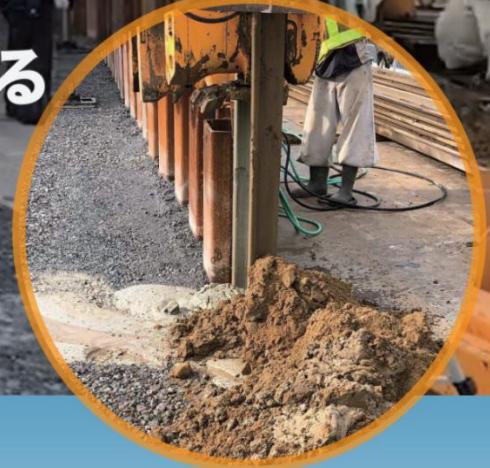


土留部材引抜同時充填工法は
宮崎大学との共同研究の技術です。

SK-080012-VR (旧登録)

**鉄道に近接した場所でも
鋼矢板を安心して引抜きできる
オンリーワン技術です。
残置による地中障害物を
残しません。**



土留部材引抜同時充填工法は、こんな所に有効です。

近接施工

事業損失防止

民家などの重要構造物に近接した箇所においては、土留材の残置が多いようです。本工法は、引抜きによって発生する空隙に対して、予め設置しておいた充填管より引抜きをしながら同時充填します。地盤変位を高度に抑制し、安心して土留材の引抜きが可能です。

ため池・河川堤防

水みちを作らない

近年は、大雨による大災害が頻発していることもあり、河川・ため池堤防における土留め工事において、水みちを作らないオンリーワン対策工法として特に使用実績が増えています。水中での施工も可能な工法です。

土壤汚染対策

土留撤去後も遮水壁

土壤汚染対策工事においては、工事完了後に2年間の地下水モニタリングが必要です。そのため土留め材を引き抜くことができません。遮水壁の機能を持つ本工法を採用することで、土留め材を早期に撤去してコストダウンできます。

杭の引抜き

高速同時充填で沈下抑制

同時充填工法は、開発当初は毎分20~30リットルで充填していました。それが現在は最大140リットルの大容量を高速で同時充填できるように進歩しました。この開発成果により、大きな断面の既設杭引抜きにも使えるようになりました。

東日本大震災復興事業にも数多く採用！

»これまでに約4万トン、50億円以上の鋼矢板を回収して、再利用しました。

甚大な津波災害を受けた仙台空港周辺において、津波防御ライン設置に伴う揚水機能拡充の為、複数のポンプ場が復旧工事として建設されました。ポンプ場に連結する延長約5kmの管渠は、住宅や埋設管に近接しているため、鋼矢板の引抜きによる事業損失防止の目的で本工法が採用されました。その後技術開発が進み、震災復興当時に比べて充填速度が2倍以上速くなり工期短縮しました。その結果、大幅にコスト削減できました。

»主な採用理由

- 01 鋼矢板が再利用できるため、震災後の資材不足という環境下で有効な手段であり、環境に配慮した工法。
- 02 引抜き周辺地盤への沈下を高度に抑制できる。
- 03 鋼矢板残置に比べてコスト削減できる。

お問合せはHPから！



hikinuki.jp

引抜同時 検索

